夕刊
磐城新聞
三月十一日一發行
定價一ヶ月金六拾錢　郵送料金五拾錢
（日曜祭日翌日休刊）

童話

お婆さんの話

（上）

千葉省三

へびのお家

——山さ、木イきりいつて、うんすら、もんすら、けえつて來たんだと、その爺んつアまがさ——。

おばあさんが縁側で、ビーンビーン糸車をまはしながら、話してきかせるんです、おれらはそのそばに寢ころんで、おばあさんのしまたすけられた、蛇でござなびた太い指先から白い綿が糸になつて、ふるへふるへ出てくるのを見るともなくなながめて聞き入つてゐるんです。

——おめらみてえな、きかんぼが大せいよつて、山かがしつかめえて、ぶつたに、り投げとばしたりしていぢめてんだと。

——そうだ、かはいそなこと、するもんぢやね、おめらだつてそうた目にあはせられたらかなしかんべ。

銭やつから、はなしてやんな。ぢんつアまはそ云つて財布だして、びた銭一枚づゝくれてやつて、その山かゞし、にがしてやつたと。

あつたかい、小春日和です。

光つた綿屑が粉のやうにとびちります。

袖無しの背中に、日がしみてポツと背中がほてつてきます。

おれらの眼は、だんだん細くなります。

——ぢんつアまはやれやれいい功徳したッちわけでうんすら、もんすら、また家の方さあるいていつたとんみたいに、中さすひこまおしやらくした、見たこともねえ姉さまがショナショナやつて來たと。

——さうすつと向うかられて、いつのまにかたいし た座敷ン中に、すわつてたんだと。

『ふうん！』

弟は細くしてゐた眼を大きくあけて、おばあさんの顔をながめます。

『さうだ節穴なんぞさ、どうしてへえれたんべ』

おれは聞きかへします。

——さうすッと、ふすまあけて、さつきの姉さまが出て來て、ぢんつアま、よく來ておくれなしやんしたと鈴をふるやうな、えゝ聲でいつたと。

耳の遠い、おばあさんはおれらの聞くことなんぞには、返事もせずにビーンビーン糸車をまはしながら話をつゞけるのでした。

それでも、おれらは、めうにその柿の木の節穴のこと、が、忘れられませんでした。

倉のかげで、ひとりで遊んでゐるときなんぞ、そのお話を思ひだして、倉のまはりに植ゑてある柿の木や栗こんだ。あの姉さまどこさいつたんだんべと思つて、あつちこつち、ながめたら柿の木にちッちやな節穴があいてたと、ここだんべかと、ぢんつアまは、眼えおッつけてのぞいて見たと。

そすッとツルツルと、ぢんつアまのからだ、ところてんみたいに、中さすひこまぞいて見たのでした。

あんなこと、作り話だと思ひながらも、ひよつとして『すひこまれて、けえれなくなつたらどうしべ』なんて思ひ思ひこはごは、のぞいて見たのでした。

の木を見てまはりました。どの木にもきつと一つか二つぐらゐづゝ穴があいてゐました。

○

霜除けの日おひ焼きけり春の園　素雪

春日抄（下）

新妻久満夫

磯山の松生の砂に降る雪は積らで消ぬる春の雪かも

うち仰ぐびわのす、葉のしづもりてさら〳〵と春の雪の降りはも

若芽ふくばらの長枝に春の雪降りつむなべに枝垂れにけり

夜のまに降りけるものか淺らかに雪かうむれる湯の嶽のいろ

小夜ふけて松に春雪重るらし蹄子あかるくなりまさりつつ

しんしんと夜の雪降れば茶をたててひぞかごころに妻と物語ふ

〔社會の今日〕

日12月3　△水戸烈公生る（寛政一二）△日曜日を休暇とす（明治九）△かか二關門地方大暴風、警察消滅令を出す（昭和五）

拈華微笑

◇文字通り名を竹帛に垂れて山崎安島兩勇士の村、葬場んぞ悲しき

◇共同購入計劃、やつたガソリン

◇當磐炭界の壽命倍加。炭都大平町の前途遼遠矣

◇商賈柄威服した松ケ岡南蛭一甌を携へて梅見は如何

◇花見計劃。早くして安心して入れるが、横がモットウのご手の六尺の壁は含燈返しで十郎左衛門ニューッと出る仕掛け、其時に長兵衛が女の正體を現はし、ウムと言つて水野の妾になれば、直様上屋敷へ引取つてお部屋様、四の五の云へば含燈かへしから腕利きを優つて十人、矢庭に風呂場に押入つて有無を云はさず殺して終ふ、斯うした譯で彼の根岸の家は新規に普請を始めた譯だが、一度遣へば用は無いから、夫れが同じ旗本菅沼勘十郎の物となり、菅沼かふの妾に呉れる約束が出來てゐる、頭梁夫れでも妾の言はうぬ惚れもあるし、政吉の事は忘れ兼てゐるところへ酒が充分に廻つて來たか燒直し、昔通り可愛がつて

△繼體天皇千四百年式年祭△西本願寺集會で婦人僧侶案通過△治外法權撤廢△浴場法令公布（同六）

○……○

○……○

講談

俠艶女長兵衛

東京　斯波南愛（魚崎潮愛）

（一五六）

政『夫りやア妙な譯だ何でお前のものに成る』變なことを云ふと思ふから幾分でも關係のある事、政吉もお前さんと妾は彼程惚れ合つた仲だ、彼の時分のことが妾は毎日のやうに思ひ出すのだよ、何だら馬鹿な彼りやアお前岩附の時さんが、言ふ通りしなくちやア殺しちまうと言つて短刀などを抜いて責められるものだから、仕方なしにお前さんと切れて仕舞つたのだよ時さんの無い今日頭梁昔通り妾を可愛がつて呉れないかね、然うすりやア何もかも話して根岸の水野の建た彼の立派な家を、お前さんのものにして上げるが何うだら、根岸の御行の松に女長袁て食つても燒いて食つても構はぬ事にするから、頭梁どうか然うしてお呉れ』

政『あはゝゝゝアだ、根岸の御行の松に女長袁て食つても燒いて食つても構はぬ事にするから、頭梁どうか然うしてお呉れ』

政『夫りやア、チャンと譯があるのだよ、ネエ政さん、お前さんと妾は彼程惚れ合つた仲だ、彼の時分のことが妾は毎日のやうに思ひ出すのだよ、何だら馬鹿な彼りやアお前岩附の時さんが、言ふ通りしなくちやア殺しちまうと言つて短刀などを抜いて責められるものだから、仕方なしにお前さんと切れて仕舞つたのだよ時さんの無い今日頭梁昔通り妾を可愛がつて呉れないかね、然うすりやア何もかも話して根岸の水野の建た彼の立派な家を、お前さんのものにして上げるが何うだら、根岸の御行の松に女長袁て食つても燒いて食つても構はぬ事にするから、頭梁どうか然うしてお呉れ』

政『誰も眞剣で無いと女かを見極めて其處で我意！』政『幾ら昔の色だつて請をしたのも檜造りの湯殿！』政『幾ら昔の色だつて請をしたのも檜造りの湯殿そんな事が眞に受けられるをこしらへたのも、長兵衛ものでは無いぢやアないか』の女である事を見現はしてけて話したのでございます樂『本當ならどうするね』厭應なしに自分のものにす政『どうも斯うもねへ只おる、風呂場は自分が好みに癪に障つたお樂の仕打ちを目出度いことだと思ふだけ依つて建たものだと吹聽し癪に障つたのではない、水よ』樂『えゝ頭梁に前さんて是非夫れを見て呉れと云野十郎左衛門のする事が大はホントに情ない事を言ふつて長兵衛を追込み、水野人氣ないと思つたのでござ人だね、妾やア眞剣なんだの御前が跡から立出で男かいます。

（前）

（前）

（前）

本社の慰問に對する謝狀一束

134

滿洲から

只涙を以て歡迎した
八市居留邦人四千名
皇軍入城前後の感激的光景

江名町出身　片寄英秋君

御蔭様を以つて病にも冒されず傷だに負はず愉快に軍務に服し東奔西走滿洲各地に轉戰致し東亞の平和のため健兒の意氣を遠く海外に發揮し得るは雪に皆様の御熱誠たる御後援の賜と深く感謝いたして居ります、皆様もとうに御存じで御座いませう、詳しい事は申上げません、滿洲事變の源は軍事上に於ては我が國と關係の宜しかつた張作霖親日を標榜して居りました學良は遂に青天白日旗を揚げ南京政對と手を握り其よりは各學生に至るまで排日を教育なし而して日一日と排日が盛んになつて參りました、學良が遼寧省に不在の時折しも九月十八日奉天北大營の旅團長王似哲と云ふ非常な排日家のため健兒の意氣を遠く